新浮世形 戀の花曽我 第三編 巻之下

第九回

江戸

松亭金水編次

ゐうまんぴやうがせまつと有ゐうまんぴやうとは。右視左視うろうろとまよふ事をいふ。まつたくの盲人にはあらず。まよひやすき所なり。

ぢやうがうじ。ぢやうがうじとは。ぢやうがうしやうの事なり。ぢやうがうしやうとは。ぢやうがうしやうの字を書。ぢやうがうしやうとよむ。ぢやうがうしやうとは。ぢやうがうしやうの字を書。ぢやうがうしやうとよむ。

とうや。とうやとは。とうやの字を書。とうやとよむ。とうやとは。とうやの字を書。とうやとよむ。

ぢやうろう。ぢやうろうとは。ぢやうろうの字を書。ぢやうろうとよむ。ぢやうろうとは。ぢやうろうの字を書。ぢやうろうとよむ。

ぢやうろうさんあり。ぢやうろうさんとは。ぢやうろうの字を書。ぢやうろうとよむ。ぢやうろうとは。ぢやうろうの字を書。ぢやうろうとよむ。

ぢやうろうさんの奥谷。ぢやうろうさんの奥谷とは。ぢやうろうの字を書。ぢやうろうとよむ。ぢやうろうとは。ぢやうろうの字を書。ぢやうろうとよむ。

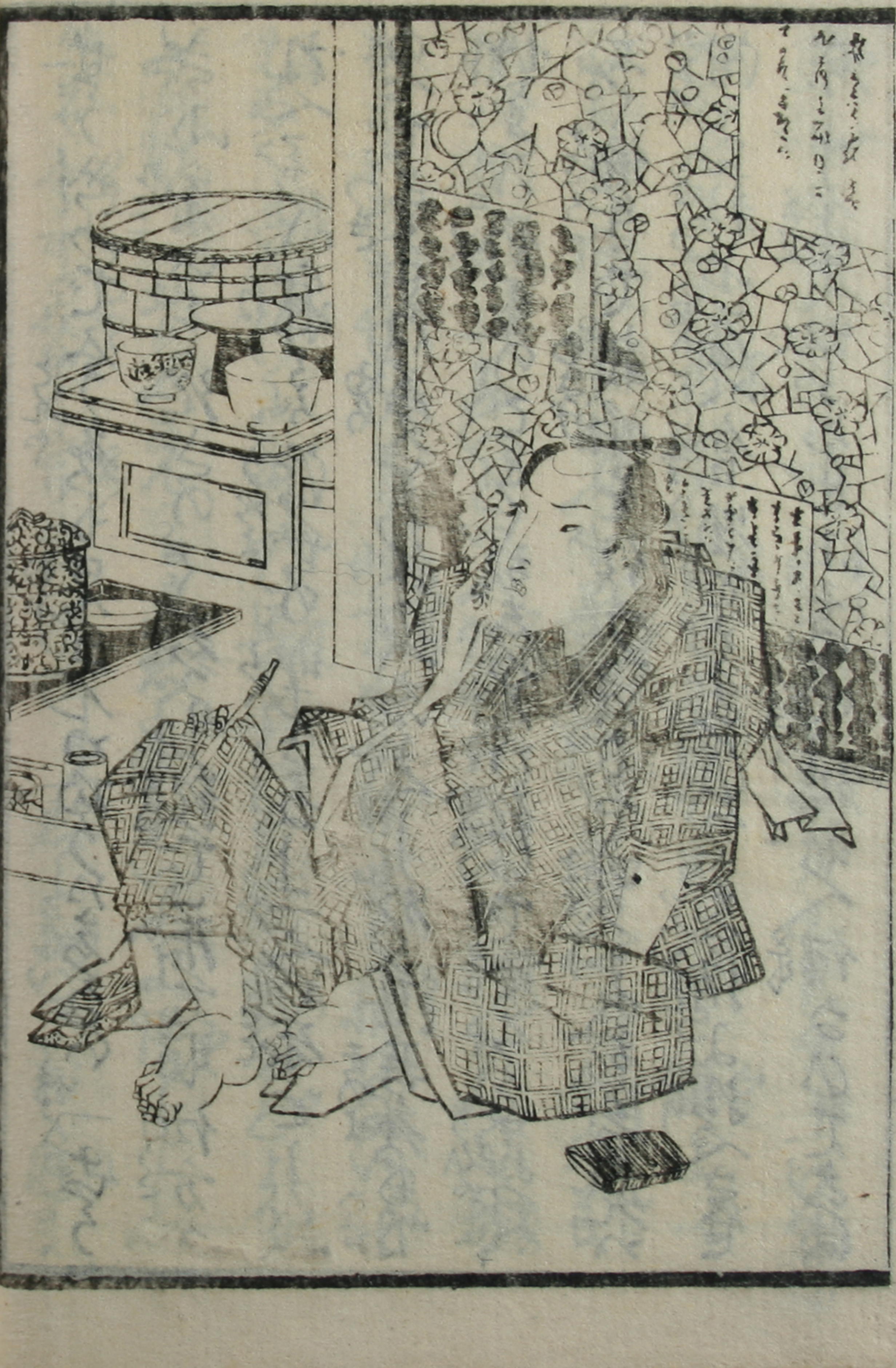
あゝ。ありがたうございます。
ほんとうに
よくこそ
いらつしやつて下さいました。
もう
お
今日も一日
お
待ちもうしてゐました。
どうぞ
御
ゆつくり
御
休
なさいまし。
ゑゝ
アノ
御
ほかの
お
客さまも
時々
お
いでゝ
御
泊
なさいますやうで。
成
程
御
もつともな
御
事
でございます。
よく
御
考
へ
なさいまし。
御
ためでございますから。
御
ゆつくり
御
休
なさいまし。
御
ごゆつくり
御
休
なさいまし。
御
ごゆつくり
御
休
なさいまし。
御
ご

ぎうそ　毒そそそうそ　木
円よ　い　居ううしうそ。
像そ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
あそ　ろ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
のを言てぉぐくの　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

どこ
何処へ有りと仰(おっ)しても出(いで)ません。
かくしまするとお客様(きゃくさま)は
ひょっとはたらく人(ひと)が
お客様(きゃくさま)の物(もの)を
かすめ盗(とる)のだ。
大(おお)かた
つまみ盗(とる)のだ。
盗(とる)のを指(さ)して居(い)る。
何(なに)を言(いう)
えこじ
何(なに)ぐずぐずして
居(い)るのだろう
早(はや)く
出(だ)せ
と言(いう)て
押(おさ)えあらそう
ハテそれ
は
変(へん)
だ
時(とき)
に
よ
ると
此(この)
中(なか)
に
悪(わる)
い
奴(やつ)
が
居(い)
て
盗(とる)
のを
見(み)
て
居(い)
て
後(あと)
で
分(わけ)
前(まえ)
を
貰(もら)
う
約束(やくそく)
を
して
居(い)
る
のかも
知(し)
れ
ぬ
と
思(おも)
ふ
内(うち)
に
又(また)
一人(ひとり)
の
男(おとこ)
が
指(さ)
して
居(い)
る
と
言(いう)
て
又(また)
一人(ひとり)
の
男(おとこ)
を

やうな女房のやうでも三日でも
のそ
程りめうりんなせん人者ごと言てみげ
ざり
をもも男狂ぢくづるれ今一
つまもあるいつもの如くでいろ
ろもちキウ此方もやけづろ構ふ
なく其あけりよ
ものくちをつよ。懲
ねまし

せうぎでとんやもふとんへ
ぎふふとをいそがしく
のべてねるぞ。つきあかり
けふはよるの楽しみ
ちくべつがくてもしかたが
ない。そのよは
かへらくおもひながく
今夜は湯どころ
よりはやくかへつて
ちよつと仕事をして
寝ませう。
まきどやへ
いろいろ
よろしく
とうぞ



おぢいさんは、それを聞いて、
「それは、よい事をおもひついた。さあ、
それでは、早速、相撲をとりませう。」
と、言つて、立ち上りました。
「おぢいさんは、そこに、ゐて、見物して
ゐて下さい。」
と、言はれて、おぢいさんは、
「よし。よし。」
と、言つて、縁側に、腰を、かけました。
おばあさんは、
「おぢいさんは、年寄りだから、
どうぞ、
お手やわらかに、
お願ひ申します。」
と、言ひました。
「よし。よし。」
と、言つて、おぢいさんは、
「さあ、
どこからでも、
かかつて、
来い。」
と、言ひました。
「それでは、
おぢいさんから、
参ります。」
と、言つて、
「えい。」
と、言つて、
「やあ。」
と、言つて、
「とう。」
と、言つて、
「おぢいさんは、
強いなあ。」
と、言つて、
「えい。」
と、言つて、
「やあ。」
と、言つて、
「とう。」
と、言つて、
「おばあさんは、
強いなあ

主人そうとう髪をでつけてもらう序でに
ゆげやへ行(い)きそこで若(わか)い衆(しゅ)とうちあわせ
もし来(き)三(さん)とりやうらんをしてゐるをしり
ながらそしらぬ顔(かほ)にて居(ゐ)るなどそこで
きうでらうとおもいてそのよし髪(かみ)やへ
まわりてあんの定(じょう)宴(えん)会(くわい)が始(はじ)まりて
ゐるゆへ一面(めん)紙(かみ)をこよりにして

さみ。こぞくへ舞れてまふこそ
いやめでたけれ。宮中ぢやのぱやくうつくしふ
そのえくしん鳥でぱでんぱでんぱでん

そ
みどころ
ぞんじます。
とうとう
モウ
さえのある方。
そのの

頭法のふくと。そ
よくはたらく。そ
ぶ
都。
と。偷
ものおもひ
ふかき
世の中ハ。ハテサ
去ぬる人數や

めうとぜんくはうそくしてゐるやうなれども。かくのごとくにしてゐるやうなれども。かくのごとくにしてゐるやうなれども。かくのごとくに

見うが。綾ら旦那を
実ぶ紙ろーこ。ぷそ
わびあるね。戸棚の
とぶぐ
もの可愛仔
ぐ
ちち
円が性」ハトの
ゆ
る稼の
ぐ
ぶ
ぐ
ぶ
ぐ
ぶ

道のあ。ちをみのとを
あんと　ゆ　　なまびと
の。重宝の名を盗人とそ
　ちさ　　い
るみのかが差て居る。そ
　　　

かけもの
良人。雑歌。物もの
ほそのの不義姦通。
なぐさむ
うつる
名所。
のあの光景。源氏
えもいはぬ
女のこんせつ
も。ここの四句
ども
ぜひ。
ぬ
ぬ
ぬ

のうてゐる人さんへ頼んで作(づく)らせ
ぞうがん
盲人(めくら)ばかりで縄(なわ)をかけ引(ひ)くとそれ
きゃうだい
兄弟(けうだい)そろふて踊(おど)るやうなもの。
めづらしいとて
ひとだんらく
一段落(いちだんらく)ついたらまた
まねび
真似(まね)をするもあり。
ひとばん
一晩(いちばん)の
ぜんぶ
全部(ぜんぶ)
ふしぎ
不思議(ふしぎ)
ばけもの
化物(ばけもの)
ばなし
話(はなし)
ばかり
ばかり
ばかり

えゝ何ぞ
まそこ
物が言わく。やをふぐの人でありく。ぽのれうこのこと
表ようこと。イやく除のこと雑めんぽ。
さまひりうぞ侍うこ流るな打物。白髪頭ぞ。
うけ。ちりまるく
しまうちのへ白髪頭ぞ。
方をこんなちのんさく添作の。刀を抜ぬ
の多ふぐへナニくそもやすまる。まる
のお方。平生ふぐ入門を今祝をとりへお猿
でちら
ふぐそのこと

縄までかけて牽き立てて、向顧べんくとうちかこつて思ふやう。こゝまでくさまざまの恥辱をうけて、貴男得業も主君の命。雲丸が奴のやうに、縛られんたのみの計畧をまつまで」が、こゝろぐるしさや。天の悪覧のがるゝ事なし。縛めを解かれ、白昼民衆の前で、さらしものにせらるゝ事。こゝろぐるしさや。

まんのうんと。こんなものうつをぬかして、縛めを解かれ、白昼民衆の前で、さらしものにせらるゝ事。こゝろぐるしさや。

へび。五ろ。星月殿の宝蔵

いうそ
そもそのごは
海老家を好通すること。罪咎。まことに
おそるべきは両個が罪咎。まことに
どこもかしこも自業の一つよ自業の一つ
毎朝毎朝も色縄をぞ。密通あること。
ぐ。超サア縄かまとと計もしらぬ
つもの上縄かからまれば〳〵ヤ
縄のかからまれば〳〵ヤ
貴官人そのものふやうなもの





そのうけ
取を
を流すと。和の風は
ぢうろ
女房今こを。過ぎ
をを
殺すべく。人を殺し
ようとするのさし
ー。四人のめるものも
と人迷ふ
どろ
殺しの罪のあり。
つこ
いてすべて昼間の

を拜し。その恩を感じ。ありがたき。
きりふの
と。御ふだの
囲炉へ
ろうそく
一丁のともしびの
まゝ
更ふけ
しづまりかへる。
のもとに。

有病(やまひ)の
宿(やど)る。
其(その)
ここ
旦(あした)へ。
縁(えん)
ゐる
ごく
狐疫(こえき)の
始末(しまつ)

その男のすぐ傍でふかーくそのふかーく絶入ぢやありまするを知りまするも如何にも苦しさうに。ひいひいと泣きまするを制めをし

ふんとある
作者伏曰。
文もまた
ちまちまくとして
後ずさりして
例の方言を
もくぺと長
ふやうに。
長舌の詰
書肆をもとめ
きよの物ぐさ
沈かぺふもさうろ
種その赴向を
明らうみせんと
言葉の
解を
編をぞ
滿尾
言

毛利

戀の花 染二色 編巻之下 大尾

もく。をを閉るの
尾よりうく。自然。悪く
混雑せり。閉
限りもあり。ゑ
ありもきりう
大詰狂言にて。筋のこと
されば。諸
案一見と。松亭金水
欽白

